

『石鉄』第五十二号刊行に寄せて

松山短期大学 第16代学長 上杉 志朗

先日実施された松山短期大学学長選挙で、溝上達也理事長・松山大学第16代学長が、第17代松山短期大学学長として選出された。第14代松山短期大学学長の八木功治先生以来、第15代清野良榮先生、そしてわたしに至るまで、松山大学と松山短期大学の学長が異なってきたのが、平成30年3月末にわたしの任期が終わると、同一人物に戻る。ここで、「戻る」といったのは、初代伊藤秀夫先生から、第13代神森智先生までは、1952(昭和27)年に、学校法人松山商科大学が松山商科大学短期大学部商科第2部を設置して以来、1989(平成元)年に、松山商科大学が松山大学と名称を変更し、松山商科大学短期大学部が松山短期大学と名称を変更した後も、両学長は同一人物だったからだ。

合従連衡は世の常だと思ふかもしれない。しかしながら、松山大学と松山短期大学は同じキャンパスにあって、両方の学生諸君は、勉学の時間帯は違えども、兼任されている先生方に教えを受け、または、単位互換で学び、熟田津祭を楽しみ、サークル活動にも参加している、いわば同胞のようなものだ。権謀術数を操って敵国と結んだり分かれたりすることとは話が違う。

世間を見渡すと、キャンパスが遠くにあるような場合には同じ学園でも別の学長を選任している場合がある。例えば、宇和島市にある環太平洋大学短期大学部は、岡山市に本部がある環太平洋大学の系列校で、両者には別の学長がいる。ところが、松山市内の松山東雲女子大学・松山東雲短期大学や聖カタリナ大学・聖カタリナ大学短期大学部は同一キャンパスにあって、学長は同一人物だ。わたしは、松山高等商業学校という礎石の上に築かれてきた学園が一人の学長の下で100周年を目指して、より発展して行って欲しい。

瀬を早(はや)み 岩にせかるる 滝川(たきがは)の

われても末(すゑ)に 逢はむとぞ思ふ

小倉百人一首77番、崇徳院の歌だ。崇徳院は、第75代天皇だったが、上皇時代に第77代の後白河天皇との争いに敗れ、讃岐国に配流され、彼の地で崩御された。上皇と天皇はともに鳥羽天皇の皇子(実際は諸説有り)であり、この保元の乱は兄弟の争いだ。拗れた関係の結果、崇徳院は怨念に固まり、生きながら天狗となったとか、晩年は夜叉のようであったとか言われており、没後20年もすると平将門、菅原道真と並び三大怨霊扱いされるようになった。

ところが、怨霊を畏れて後白河院が態度を改め、名誉を回復し、鎮魂に励んだところ、一転、四国の守り神となったという。香川県坂出市にある、崇徳院の御陵、白峯陵は、江戸時代の歴代高松藩主が篤く祀ってきた。現在でも、崇徳院ゆかりの地は観光名所となっていて、ツアーが組まれたりして人気を集めている。御歌は恋の歌とされることが多いが、讃岐配流後の作とされているので、単純に恋い焦がれながら離ればなれになった恋人達の気持ちを代弁した歌とするよりは、恩讐を超えてひとつになることを切望した歌とする説もある。わたしは、後者の方が意味深いと思うが、諸賢はいかがだろう。